

読んで見つける、新しい世界、新しい自分

読み物機関誌

# 青いスピル

春

2023

第2号

作品募集・入選作品

「自動販売機」 香久山ゆみ



伊藤ハムスター

神野紗希

松野陽一郎

佐藤いつ子

# 青いスピンの 目次

- 1 創作「R・Y・O」 佐藤いつ子
- 10 作品募集・入選作品「自動販売機」 香久山ゆみ
- 18 科学エッセー「算数・数学のよいところ」 松野陽一郎
- 22 エッセー「俳句、その自由な光」 神野紗希
- 24 イラストエッセー「学校あるある」 伊藤ハムスター
- 26 コラム「目で読むSDGs図鑑」
- 28 コラム「世界の友だちの一日」
- 30 第一回「青いスピン」作品募集 結果発表
- 32 作品募集のお知らせ

「スピン」って、何だか知っていますか？  
本に付いている細いリボン、  
しおりひものことです。

読んでいた本からはなれるとき、  
ページにそつとスピンをはさんでおけば、  
またいつでも、

その本の世界にもどることが出来ます。

そして、「青」は、

青春や青空をイメージさせる色。

これから未来へ羽ばたくみなさんの色です。

「青いスピン」と名づけたこの冊子には、  
物語からノンフィクション、イラストエッセーまで  
さまざまな読み物を集めています。

青いスピンを手がかりに、

あなただけの新しい世界を見つけてください。



「よお、今度の日曜日空いてるか？」

昇降口で、僕は靴箱からあわてて運動靴を取り出した。この声は同じクラスの来次だろう。五年生でいちばん、体も態度もでかい男子。ほとんど関わりはないけれど、来次の押し強さが苦手だ。早く立ち去ろうと、運動靴をひっかけ足を踏み出した。つま先に体重をかけながら、前のめりになる。

「よお、青山瑠！　なんで逃げる。」

背筋がしゅつと伸び、すんとかかたが落ちる。「よお」というのは、誰かへの呼びかけであって、まさか僕を呼んでいるとは、思いもよらなかった。だって、僕のことを「瑠」と呼ぶ人はいない。「ぼ、僕？」

「そう。だから、今度の日曜日空いているかって。」

おそろおそろ振り返る僕に、来次がせつついた。その圧に、思わずうなずいていた。

「よっしゃあ。トンボとり行こうぜ。」

トンボって秋じゃ——。ごによごによつぶやくと、来次は得意そうに言葉をかぶせた。

「瑠は頭いいのに、そんなことも知らないのか。もうこの時期から出てくるんだって。」

決まりな、と言って来次が去ったあと、どんよりくもった梅雨空を見上げた。約束をした「日曜、十時、校門前」を頭の中で復唱する。

腕時計の針はもう十時半を回っている。梅雨なのに、朝から太陽はじりじりと照りつけていた。校門のそばには、さえぎるものが何もない。キャップ帽のきわから、汗がじわりとしみ出した。

完全インドア派の僕が、友達とトンボとりに行くことを伝えると、お父さんは予想以上に喜んだ。外で友達と遊んだりしないことを、実は心配されていたらしい。

お父さんに百円ショップで買ってもらった、緑の虫かごを斜めにかけて、虫とり網を地面についている。アスファルトに伸びたそのシルエツトが恥ずかしい。

スマホがあれば連絡できたのに。別に欲しくなかったから、ねだりもしなかった。今さら悔やむ。

まさか事故？　いや、約束を忘れてしまった？　不安が頭の中を、回遊魚みたいに回り続ける。

一時間待って来なかったら、帰ろうと決めた。だが、いくら待っても来次は現れない。

時計を見ると、十一時までまだあと七分。暑さが増した。頭がくらくらしてくる。ゆうべは緊張していたのか、寝付きが悪かった。完全な寝不足だ。すると、ひよっこり来次が現れた。

「いやあ、わりい。寝坊しちゃってさ。待った？」

待った？　全く悪びれていない来次に、僕はとっさに反応できず、口をばくばくさせた。

「瑠の携帯分かんなくてさあ。聞いときやよかった。」

「僕、携帯持っていないし。」

「連絡手段なかったんなら、しょうがなかったな。」

何がしょうがなかったんだか。絶句する。

「さ、行くべ。永田緑地にある、秘密のトンボスポット、教えてやる。」

来次は大遅刻のことなどなかったかのように、機嫌良く大股で歩き出した。

永田緑地に入ると、いよいよ来次は駆け出した。僕はついて行くのに必死だった。

「瑤、おせえぞ。」

それ言うか。大遅刻のくせに。心の中で言い返す。

来次に追いつくと、木々に囲まれ、よどんだ感じのため池があった。僕は肩で息をついた。

「ここな、先週もとれた。」

池の向こうを、しゅんと青いトンボが飛び去った。

「先週も来たの？」

「おん。あーちゃんと健と。今日は、あーちゃんは塾の模試、健は暑いからイヤだって。」

二人は、来次がよくつるんでいる、元気のいい男子たちだ。

来次はトンボを探すように、きよろきよろしている。僕はつばを寄せ集めて、飲みこんだ。

「じゃあ、な、なんで、僕のこと誘ったの？」

来次は左右に振っていた首を、僕の顔でびたりと止めた。

「別に。ただそこに、瑤がいたからだだけ。」

あたりまえのように答えて、来次は再びトンボを探し始めた。僕は、来次の向こうに広がる空に目を移した。来次は、僕とは違う地平を生きている。じとじと考えたりしないんだ。

「あっ！ さっきのトンボかな。戻って来たぞ。」

来次は池の向こう側へ、さっそうと駆けていった。青いトンボが池のふちに止まった。来次はトン

ボに近づいていくが、なぜか知らんぷりしている。すると、いきなり虫とり網で空を斜め切りした。

「よっしゃあ。一匹目、ゲットだぜ！」

来次のところにダッシュした。来次が手にしたトンボは、どこかのきれいな群青の海——そこにミルクを混ぜたみたいな水色だ。その神秘的な色に、目がくぎ付けになった。

「これはシオカラトンボのオス。きれいだろ。メスは黒と黄色なんだ。」

来次は自分のことを自慢するみたいに言うのと、片手を掲げてトンボを逃がした。

トンボは、うす水色の空をバックに、はねを広げて飛び去った。はねも青みがあった透明で美しい。

「逃がしちゃうの？」

「おう。虫かごに入り切れないほど、とれるし。」

来次は僕の虫かごに、ちらつと視線を向けた。そういえば、来次は虫かごを持っていない。

「あっ、来たぞ。今日はトンボ日和だ。」

晴れわたる空を見上げ、来次が声を弾ませた。池には五、六匹のトンボがしゅんしゅん飛んでいた。

「トンボもえさが見えやすいから、出てくるんだ。」

「来次くん、すごいね。よく知ってるね。」

教室の中では、勉強が苦手そうに見えたのだけど。

「おい。くん付けで呼ぶの、マジやめろ。」

来次は照れくさそうに鼻の下をこすると、トンボを目がけて、また池の向こう側へ回った。

「二匹目、ゲット！」

よし、僕も、と気合を入れた。トンボの数が増えてきたが、とれそうでいつこうにとれない。トンボは予想以上に俊敏で、なかなか網にかかってくれない。

向こうから、「三匹目！」という来次の大声が響く。僕はあごを伝う汗をぬぐった。

ふと、すぐそばの背の高い雑草に、シオカラトンボが止まっているのに気づいた。黒と黄色だから、メスだ。僕は、トンボの正面にそろそろと移動し、眼のあたりでゆっくり人差し指をぐるぐる回した。トンボは指の動きに合わせて、頭を回している。

眼を回したトンボは素手でもとれる——。と、ゆうべお父さんは得意げに話していた。

もういいかな、と右手を近づけたとたん、トンボはしゅんつと飛び立った。

「何、今の。トンボが眼回すわけ、ないじゃん。それ完璧迷信。」

いつの間にか後ろに立っていた来次が、人差し指をぐるぐる回しながら、げらげら笑っている。僕はうつむいて、上目づかいに来次を見上げた。お父さんから聞いた話をぼつぼつしゃべった。

「トンボのとり方はだなあ。奴らは複眼だから、四方八方警戒してるわけよ。だから、君たちのことなんて気にしてません、つてふりして、サツと一振り。」

来次は、二、三歩歩きながら、エアで虫とり網を振ってみせた。僕はこくりとうなずいた。今度は絶対、成功させてやる。

知らんぷり、そしてシュツ。だけど、何度やっても、惜しいところで逃げられる。

「手首のスナップ、もつときかせて。近づくときは、気配消して。ああ、集中して。」

気づくと、来次は自分がとるのをやめて、つきつきりになって指導している。最初は素直に聞けた

のだが、だんだんもやもやしてきた。

「そんなんじゃ、一生とれないよ。瑶、残念すぎる。」

肩をすくめた「オーマイガー」のポーズ付きだった。何か之急にこみ上げた。

「来次くんはいいよね。ゆっくりながあく、寝られたんだもん。僕みたいに、寝不足じゃないし。」すらすらと嫌みったらしい言葉が飛び出した。

「は？ 瑶、まさか俺の遅刻のこと言ってる？」

来次の射るような視線が、僕を刺した。僕はくつとあごを引いた。怒らせてしまったに違いない。来次は鼻から息を吸うと、胸を反らせた。

「ちっちええやつだなー。」

ちっちええやつ……。思わぬ言葉に緊張がほどけた。喉が震え出し、こらえきれずに吹き出した。

「え、俺なんかおもしろいこと言った？」

ほんと、天然っていうか、自己中っていうか。——でも、ちょっといいかも。

笑いを収めたときだ。数メートル先の池のふちに、大きなトンボが止まっているではないか。

切り取られた画像みたいに、そのあたりだけ空気が止まって見える。黒と黄色だけど、シオカラトンボのメスとは模様も違うし、サイズ感も存在感も全然違う。

「ね、来次くん。あれ、でかくない？」

僕のひそひそ声に、来次は目を見開いた。

「オッ、オニヤンマだ！」

来次は手で口もとを覆った。そして、「お前行け」というように、あごをしゃくった。

僕はびっくりして、人差し指を自分に向けた。来次はうん、うん、とうなずく。

深呼吸した。すっと肝が据わった。なるべく見ないようにして、静かに近づいた。首だけで振り返って、来次に目配せすると、来次も親指を立てた。

今だ！ サツと斜め切り。オニヤンマは、見事、網にかかった。

「やったな、瑠！ すごいぞ！」

来次が飛んできて、網の中のオニヤンマをつかんだ。ゆうに十センチくらいはありそうだ。

ほれぼれ見つめていると、来次は僕の腰のところにかかっている、虫かごの蓋を勝手に開けて、オニヤンマを中に入れた。

「お父さんに見せたいだろ。……じゃ、そろそろ帰ろっか。さすがに暑すぎ。」

来次はすたすた歩き始めた。

「来次くん、いや、来次。オニヤンマの写真、スマホで撮ってよ。あとでちようだい。」

来次が振り向き、目をしばたかせた。僕は続けた。

「やっぱり、持って帰ったらかわいそうだよ。ここのほうがきつと生きやすいよ。」

来次の顔に、じわりと笑みが広がった。

「だな。じゃあ……。」

来次は、リュックからスマホと細い油性ペンを取り出した。

「トンボの調査員は、はねに記号を書いて、また放すらしい。それで、もし別のとこでとれたら、ト

ンボがどこまで飛んだのかとか調べるんだって。今日は瑠がオニヤンマとつた記念に、書きちゃう？」

来次の日に焼けた額には、汗がきらきら光っている。僕の口もとがほころんだ。

「いいね。」

来次は慎重にオニヤンマを取り出し、はねを押さえると、ペンで「R・Y・O」と書いた。

「来次と瑠とオニヤンマの頭文字。」

「なるほど！ R・Y・O。」

今度は僕も、オニヤンマを持ってみた。ばたつく四枚のはねを何とか指で挟みこんだ。指に振動を感じながら、ひすいみたいな緑色の複眼を、堪能する。吸いこまれそうだ。写真もたくさん撮った。

「じゃ、そろそろ放すね。」

「おう。」

一、二の、三、で指を離れた。オニヤンマのR・Y・Oは、雲一つない色画用紙みたいな空を威風堂々と滑空し、あつという間に見えなくなった。

また、R・Y・Oに遭遇できるといいね。来次もきつと、そう思っているはずだ。



# 自動販売機

かぐやま 香久山ゆみ 絵・旭ハジメ

「深夜0時に公園の裏の自動販売機の取り出し口に手を入れると、引きずりこまれるんだって。」

いちかちゃんと言う。ふたばちゃんとみつえちゃんと私は、「へえ。」と声をそろえる。その反応に満足したいちかちゃんは、いじわるそうな視線をのださんへ向ける。「でも、うわさが本当かどうか、試さなきゃ分からないよねえ。」

いちかちゃんが大きさにため息をつく。

「だれか試しに行ってくれないかなあ。」

「だれか」の部分をごとさら強調して言う。ふたばちゃんとみつえちゃんと私は、ちらと視線を合わせる。

「のださんの家って公園からいちばん近いよね。」

ふたばちゃんと言う。

「のださん行ってきなよ。」

みつえちゃんと言う。

「そ、そうだよね。のださんなら怖いのも平気そうだし。」

私が言う。

のださんは何も言わずにじつとうつむいている。肩に

かかる髪が顔をかくして、表情は見えない。

「じゃあ、決まりだね。」

いちかちゃんがパンツと手をたたく。

「ふたばちゃんたちもこう言っているんだし、のださん確認してきてよ。」

「……。」

「ねえ？」

「……夜中に外に出るなんて、無理だよ。」

髪の毛の間から、ぼそりとのださんが小さな声を出す。

「ええ？」

いちかちゃんが大きな声で聞き返す。

「……無理、夜に外出なんてできない。親に怒られる。」

「大丈夫だよ。見つからないようにこそつと出て行って、

ささつと試して、またそつと帰ればいいんだよ。のださん、そんなことくらいできるでしょ？」

いちかちゃんののださんの顔をのぞきこむようにして

言う。のださんはさつと顔をそむけて、小さな声をしぼ

り出した。

「……分かった。」

「約束だからね！」

いちかちゃんはまた大きな声で言った。

それが金曜日のことだったから、私たちが次に顔を合わせたのは、土曜・日曜を以て、月曜日になってから。だから、私たちはすっかり例の自動販売機のことを忘れていた。

「おはよう。」

「おはよう。」

いちかちゃんの席の周りに、ふたばちゃんとみつえちゃんと私が集まる。いつもの朝。のどさんがまだ来ない。けど、別にだれも気にしない。例の話をすっかり忘れているから。私たちは、わいわいと昨日更新された動画チャンネルの話で盛り上がっていた。

「おはよう！」

入り口から元気なあいさつが聞こえて、その瞬間、教室がざわめいた。何だろうと、私たちも振り返ると、あ

いさつの主はまっすぐこちらへ近づいてきた。

「おはよう！」

私たちの前に立ち止まって、のどさんが大きな声で言った。はつきりと私たちを見ながら。私たちはほかんとおどろいて、返事するのを忘れた。だって、いつもののださんなら、もっと聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声であいさつする。それで、いちかちゃんに「何て？」って聞き返される。

「お、は、よ、う！」

のどさんがまたあいさつをして、ようやく私たちもわたたと返事をした。

「お、おはよ……。」

「行ってきたよ。」

「え？」

「自動販売機。」

のどさんがそう言ったときもまだ、私たちはだれも金曜日の話を思い出せずにきよとんとした。

「ちっ。」

たぶんいちばん近くにいた私にしか聞こえなかったと思うけど、のどさんは確かに小さく舌打ちした。

「自動販売機、深夜0時に。行ってきた。」

「ああ。」

私たちは間の抜けた返事をした。本当に行ったんだ。

「いたよ。」

「えっ。」

「取り出し口に入れたら、中に変なのがあったよ。のどさんは言い聞かせるみたいにゆっくり言った。

「え、何がいたの？」

「お化け？」

「一人で行ったの？ 親に怒られなかった？」

ふたばちゃんとみつえちゃんと私は矢継ぎ早に質問した。親にだまってパジャマのままこっそり抜け出して公園まで行ったら、のどさんが答えている途中で、いちかちゃんが吐き出すように言った。

「ばっかじゃないの。お化けなんて、いるわけないじゃん。」

いちかちゃんはすこぶる機嫌が悪そうだった。「そうだよ。」と私たちがあいづちを打つより先に、のどさんが口を開いた。

「いちかちゃん、うそついたの？」

のどさんのはつきりとした大きな声が教室にひびいた。それまで教室のあちこちでおしゃべりしていたクラスメートたちはしんと静まり返り、みんなが私たちの方を見た。「いちかちゃんが、公園裏の自動販売機にお化けが出るから見に行けって言ったんだよね。だから、あたし夜の0時に家を抜け出したのに、いちかちゃんうそついたの？」

教室中に聞こえるように、のどさんは声を張り上げる。クラス中がちらちらとこちらを見て、ひそひそ何か言っている。いちかちゃんはさつと顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。

別にもうどうでもいいけど、のどさんがつぶやいて自分の席に戻っていくのと同時に始業のチャイムが鳴って、先生が入ってきて、この話はそれきりになった。

次の休み時間から、いちかちゃんのはださんに話しかけなくなった。移動教室も声をかけずばらばらだったし、下校のときにも誘わなくなった。けれど、のださんは平気な顔で、休み時間は一人で本を読んでいたし、水曜日にはもう別のグループの子に宿題を教えていた。

それで、私たちのグループで、もともとのださんの役割だったのが、私に回ってきたのだ。

いちかちゃんは、絶対に答えられないような難しい質問や、ややこしい話は、必ず私に振るようになった。それで答えられなかったら、「ええ、そんなことも分からないの。」と大げさに言う。ふたばちゃんとみつえちゃんもいっしょになって笑う。二人だって答えられないくせに。

「ものまねしてよ。」って私だけに言う。やりたくないけど、また「空気読まない。」って言われたくないからやってみせると、「全然似てなあい！ ねえ？」って大声で笑う。私は早くももう限界だった。

「……でも、のださんが戻ってきてくれないと、私が困るの……。」

何とか消え入りそうな声をしぼり出す。本当に、情けなさすぎて消えてしまいたい。

「何で？」と聞き返したのださんに、「さみしいからだよ。」とか平気で答えられるほど厚かましくはなれなかった。

私のだまりこんでいると、のださんはふうとため息をついた。あたしだっていやだよ、という思いが伝わってきた。怒って行ってしまうかと思ったけれど、のださんは私に向かって言った。

「じゃあ、いっしょに公園裏の自動販売機に行ってみる？」  
「え？」

ぼかんとしていると、「いやなら別にいいけど。」と言うので、私はあわてて「行くよ！ 行く、行く！」と返事した。例の自動販売機に行ったら、私も変われるだろうか。

土曜日の深夜0時に公園で待ち合わせした。

だから、金曜日の放課後、先生に呼ばれたからとうそをついて、いちかちゃんたちを先に帰らせて、下校途中ののださんを一人で待ちぶせした。

「のださん！」

公民館のかけから声をかけると、のださんは少しおどろいた表情をした。けどすぐに落ち着いた声で返事した。  
「何？」

「私たちのグループに戻っておいでよ。うそついたこと、もうだれも怒ってないからさ。」

「うそじゃないよ。」

のださんは答えた。

「でも……。」

お化けなんているわけない、うそに決まってる。そう言おうと思ったのに、声にならなかった。本当は私も疑っているからだ。——もしかして、って。

だって実際に、自動販売機に行った日からのださんはすっかり変わってしまった。それこそ、お化けに会うとか、不思議な体験でもしない限り、ありえないくらいに。

けど、そもそもどうやって夜中に家を抜け出すのかに頭をなやませた。何かあってもすぐに逃げられるように自転車で行くことにした。カチャンと開錠する音でばれないように、日中のうちに鍵を差しておいた。ふとんの中にぬいぐるみを身代わりに寝かせて、そつとベランダから抜け出した。

夜の街は昼間とは雰囲気がちがう。あちこちの家にはまだ明かりがともし、テレビの音なんか聞こえてくるのに、街灯に照らされた道はなぜかいつもよりしんと静かな気がした。私は全速力でペダルをこいだ。

公園の入り口に着くと、すでにのださんが待っていた。

「ごめん、おそくなって。」

と、私が言い終える前に、「行くこう。」と、のださんは公園の裏に向かって歩いていく。「こんな時間だし、さつさとやっちゃおう。」と言って、別に怒っているわけではなさそう。

公園の裏、白い光を放つ自動販売機。その一角だけが橙色の街灯に照らされて、薄暗い中でひとときわ明るい

のに、なぜかいつそう不気味な感じがする。

「ほ、ほんとにお化け出るの？」

「さあ。」

私がこんなに怖がっているというのに、のださんはつれない。きつとうそだからだ、そうだ、そうにちがいない。早く終わらせて帰ろう。

ポケットから小銭こぜにを取り出し、投入口に入れる。いつものミルクセーキのボタンに指をのぼす。

「だめだよ。」

のださんが言った。ボタンを押す寸前すんぜんでぴたりと指を止めて引っこめる。

「今、何考えてた？ いつもと同じじゃ何も変わらないよ。」

のださんがじつとこちらを見つめながら言う。

「え、えっと、じゃあ、コーラとか？」

私が言うのと、のださんがぶはっと笑った。

「すぎさんて、ちょっと変だよ。」

「えっ、のださんほどじゃないよ。」

そう返したら、また笑った。笑いやむと真面目な顔になり、のださんは言った。

「あたしはね、いちかちゃんからこんな言い方されるのは、これが最後になりますようにって、念じながらボタンを押したよ。そのためには絶交されてもいいって。」

すぎさんは？ と、のださんはまっすぐにこちらを見つめる。

「私は……。」

のださんと同じだと言おうとして、やっぱり言い直した。

「私も今みたいな感じはいやだけど、でも。……私が転校してきてだれからも話しかけられなかったときに、いちばん最初に話しかけてくれたのがいちかちゃんだったの。いっしょに帰ろうよ、って。私、いちかちゃんに一度もいやだって伝えたことがないから、いちかちゃんは私がいやがっているって気づいていないのかもしれない。だから、まずは、はっきりいやだって言ってみる。」

そう言うのと、のださんは小さく笑った。

「お人よしだね。」

「のださんほどじゃないよ。」

「あはは。自分でもそう思う。あたし、すぎさんからけっこうひどいこと言われたのにな。」

「……ごめん。」

「別にもういいよ。」

あまり期待されていなさうだったので、「次からは、ちゃんと気をつけるから！」と、にぎりこぶしを作って言うのと、また笑われた。

こんなに笑うのださんは初めて見たかもしれない。そして、こんなにしゃべる私も、たぶん初めてだ。私たちはいつも、いちかちゃんを中心に会話していたから。

「グレープジュースだよ。」

「え？」

「押すのはグレープジュースのボタン。」

のださんが右端みぎはしのボタンを指しながら言う。のださんが好きなやつだろうかと思いつつながら紫むらさきと白しろのストライプの缶かんを見つめていると、のださんも財布さいふから小銭を取り出した。

「一人で行かせるのは心配だから、あたしもいっしょにボタンを押してあげる。」  
と言う。

「えっ。やっぱり取り出し口に手を入れたら、どこかへ連れて行かれちゃうの？」

私がおどろくと、のださんはふふふと笑った。

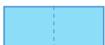
でも、のださんがいっしょにいてくれるなら何だか大丈夫な気がする。私は今度こそ右端のボタンに向かつて指をのぼした。

皆さんは、算数・数学を、どんなものだと感じていますか。私もずいぶん長い間、算数や数学とつき合っていますが、いまだに、「こういうものです」と一言で言うことはできないでいます。よいものであるとは感じていますが、語りだすとどうにもまとまらないのです。

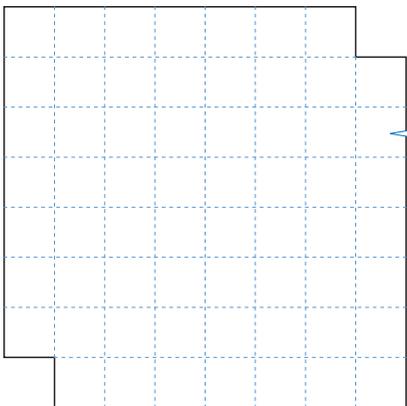
ここでは、考えるきっかけになるように、このページで話せる算数・数学の問題（と少しのおまけ）を以下に用意しました。ぜひ、考えてみてください。

問題

図1のような長方形のタイルが31枚あります。

図1  正方形のマスが2個分 × 31枚

これを図2の図形にぴったり敷き詰めることはできるでしょうか？

図2  正方形のマスが62個分

面積としては小さな正方形（マス）が62個分なので、面積の計算は合っていますね（ $2 \times 31 = 62$ ）。

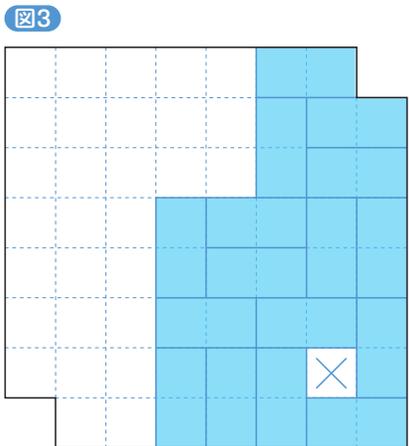
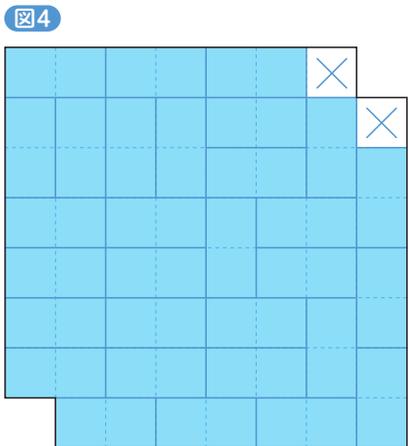
こんなに広いところに小さいものを詰めていくので、どうにでもなりそうな感じがしますね。そこで端から思いつくままにタイルを置いていくと……おや、置くほどに制限がきつくなり……どうしても長方形のタイルを置けない場所ができてしまいます（図3・図4）。

しかし、一回や二回失敗したところで、「こんな絶対できない」とあきらめるわけにはいきません。「ほかにもっとうまいやり方があるかも」と、もっとがんばってみるのが当然だと思いますが、いくらやってもうまくいきません……などと私が自信たっぷりと言いきるのは、何かからくりがありそうですね。実は、どれほど工夫してタイルを置いていったとしても、きれいに敷き詰めることは絶対にできません。

なぜでしょうか？ いきなり結論だけ言われても、すぐ信じる気にはなれませんね。誰もが納得できる論理をもとに、誰にもわかるように説明されたことだけが、数学では正しいと認められます。

この問題には、短くて明快なとてもよい説明があるので、それを紹介しましょう。まずは、図2の62マスの正方形を、互いに塗分け分けるのです（次のページ図5）。このような模様を市松模様、チェッカー模様などといいます。「鬼滅の刃」で見た人も多いでしょう。

そして、次の2つのことを考えましょう。これが納得できれば、もうゴールは間近です。



① 62マスのうち、緑色のマスは30個、黒色のマスは32個ある。

② 図1のタイルをどこに置いたとしても、それで覆われる2つのマスのうち、一方は緑色、他方は黒色である。

では、①と②を組み合わせて考えてみましょう。図1のタイルは31枚ありましたが、もし図1のタイルをきれいに敷き詰めることができるすると、②のことから、緑色のマス、黒色のマスはそれぞれ31個ずつタイルで覆われるはずですが、しかしそれは①の「緑色のマスは30個、黒色のマスは32個ある」ことと話が合いません（「矛盾が生じる」といいます。「矛盾」はつじつまが合わないことという意味の故事成語です）。だから、タイルをびったり敷き詰めることはできないのです。

私はこの問題に対するこの説明がとても好きです。その理由をいくつか挙げてみます。みなさんはどう思われるでしょうか。

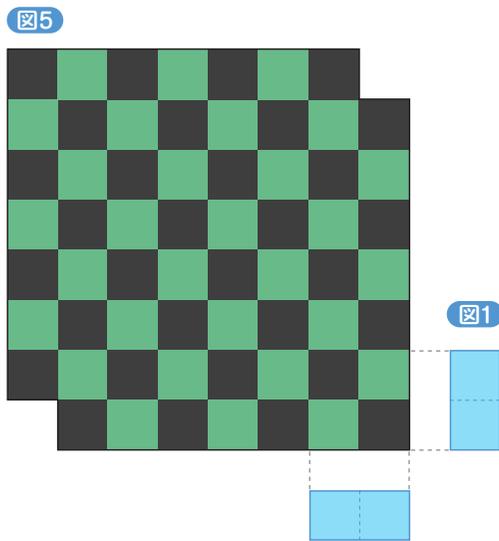
● タイルを敷き詰めることと一見全然関係なさそうな「市松模様の塗り分け」が解決に役に立つ意外性。「どうしてこんなことを思いつけるんだらう？」と、不思議なものを見たような、わくわくした気持ちになります。

● 見た目に納得しやすい。タイルを縦向きに置いて横向きに置いて、確かに、緑色のマスと黒色のマスを1つずつ占領します。これはあまり考えなくても「目で見て」わかります。だからタイルを31枚置けば……と考えを進めるところに、無理がありません。不自然なことを考えなくても解決できるのはとても気分がよいです。

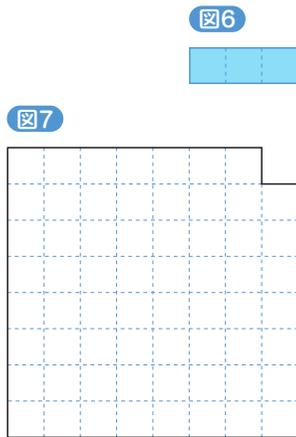
● 一瞬でわかる。タイルの置き方をあれこれ何度も試してみる、という作業を一切しないで説明が完結するのはすごいと思います。何度も敷き詰めるのに失敗し、でも実はうまく置き方があるのかも……と迷う心を瞬時に安心させる説明です。論理の力、数学の力を感ぜさせられます。

この問題に対する説明は、これしかないわけではありません。地道に場合分けを続けて「敷き詰められない」と結論づけることもできるでしょうし、コンピューターにタイルのあらゆる置き方をすべて調べつくさせるのも立派な説明方法だと思います。しかしそうであっても、ここに紹介した説明のおもしろさ、さわやかさは、やはり抜群のものだと思えます。そしてそれは、私が考える〈算数・数学のよいところ〉ととても深い関係があるように思えるのです。

みなさんが日頃学校で向かい合っている算数・数学と、いま私が話したものは、あまり似てないと感じるかもしれません。学校での授業は、算数・数学を使いこなせるようになるための基礎トレーニングでもあるので、なかなかこのような鮮やかな話ばかりではないでしょう。でも、そんな学校での算数・数学の先には、美しいアイデアとみごとな整合性に満ちあふれた算数・数学があるのです。みなさんにちょっとでも、そんなことを感じていただければ幸いです。



②の考え方  
図1のタイルを1枚置くと、縦と横どちらの向きでも緑色のマスと黒色のマスが1マスずつ覆われる。



### 追加問題

解答は  
33ページ

では、みなさんにひとつ、別の問題に挑戦していただきましょう。今度は図6のようなタイル21枚と、図7のような図形を考えます。タイルをこの図形にびったり敷き詰めることは、できるでしょうか、できないでしょうか？ ぜひ考えてみてください！ さっきの考え方が役に立ちます。とはいえ、そっくりそのままではありませんよ。

「学校」と聞いて、あなたはどんなことをイメージするでしょう。楽しいですか？ それともちよつと苦手ですか？

学校が好き朝顔に水をやる 津田清子

学校の試験過ぎたる昼寝哉 正岡子規

一句目は、なぜ学校が好きなのか、私は朝顔に水をやるのが好きなんだ、と答えました。違う人が詠めば、〈学校が好き給食のさつまいも〉とか〈学校が苦手プールで目を洗う〉とか、人の数だけ、好きな理由、苦手な理由が出てくるでしょう。二句目は、テストの時間は終わっちゃったな、と思いつつながら、のんびり昼寝をしています。明治時代に俳句を革新した子規さんも、テストは嫌いだっただようです。

「学校」という言葉が指すのは、さまざまなことを学ぶ場所です。でも、思い起こすイメージは人によって違います。「学校」と聞いてにつこりする清子さんもいれば、面倒くさそうな子規さんもいます。好きでも苦手でも、どちらでも大丈夫。俳句は、こうあるべきという理想の姿を決めてしまわず、ありのままを受け入れてくれる、自由な詩です。

次に、「桜」という言葉から、何をイメージしますか？ 咲き始め、満開、散り際。教室の窓から一人で眺める桜もいいし、お花見のように人と見る桜も華やかです。

ちる櫻白馬暴るるごとくなり 正木浩一

さくら、ひら つながりのよわいぼくたち 福田若之

一句目は、強い風に満開の桜がゆつさゆつと揺れるのを、白馬が暴れているようだとたとえました。

散りゆく桜の最後のあがきが、命のかたまりとなって躍動します。二句目、今を生きる「ぼくたち」は、学校や塾で会えば仲良くするし、メッセージを送り合ったりもするけれど、風が吹けば離れてゆく桜の花びらみたいに、実はつながりの弱い者どうしなのかも。現代に生きる心もとなさ。同じ散る桜でも、かたまりか、ひとひらか、導き出す感覚もずいぶん違います。

俳句では、こうした言葉のイメージを活用します。「学校」って、「桜」って、どんな存在だろう。思いつくイメージを膨らませ、五七五のリズムに乗せていきます。このとき大切なのは、「私」の感じ方です。学校を好きと言ったほうが先生は喜ぶかな、桜は満開のほうが俳句らしいのかな、なんて気にする必要はありません。人の目を気にせず、「らしさ」に引っ張られず、桜を私に引き寄せるのです。誰のものでもない、私にとっての桜。俳句に私の血を一滴与えることで、十七音の言葉は、新しい輝きを放ちます。

最後にもう一つ、「光」という言葉は、どんなイメージをもたらしませんか。

海へ剝く蜜柑よ光なら此処に 神野紗希

待ちわびた太陽ひかりのそばへ鉢 ウラジスラバ・シーモノワ

この冬、同じ「光」というテーマで、ウクライナの俳人シーモノワさんと交換した俳句です。私の家は祖父母がみかん農家だったので、海が見える山でよくみかんをいって食べました。「光」と聞いたとき、海光に暖かく照り返すみかんを思い出したのです。シーモノワさんは、侵攻の影響で避難生活を続けています。曇りが多い季節、やっとなつれた朝に、鉢植えを窓へ運び、日光を当てました。命の源である太陽に、つらい日々の希望の光が重なります。

「学校」「桜」「光」……言葉を一つ決めて、自由にイメージを膨らませてみましょう。きつと、あなたらしい俳句ができるはずですよ。

# 学校あるある

学校でよくある出来事を、ねこの兄弟、タマとマルが楽しくしょうかいします。

伊藤ハムスター



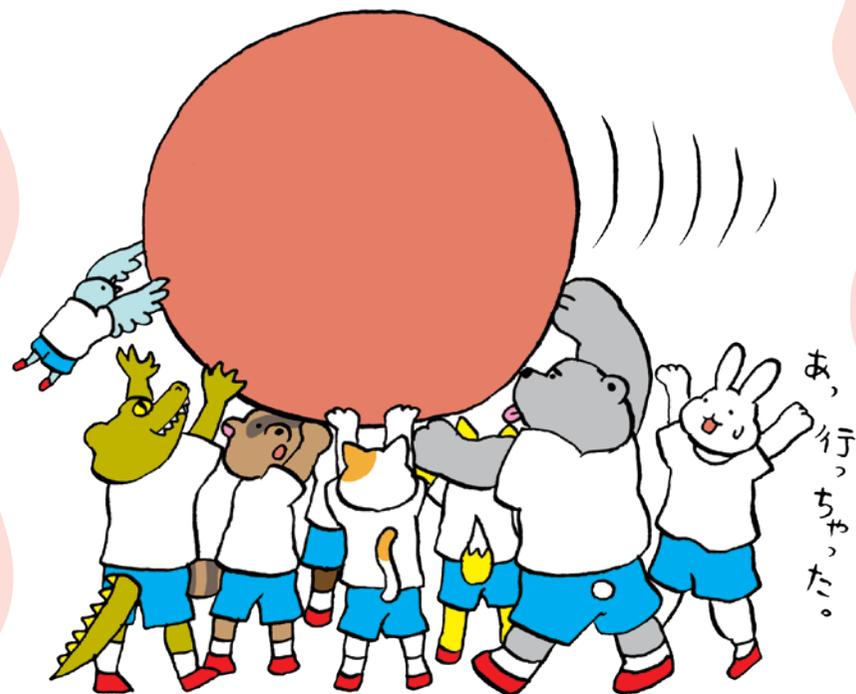
第二回!



1年生はランドセルを閉め忘れて中身ひっくり返しがち。



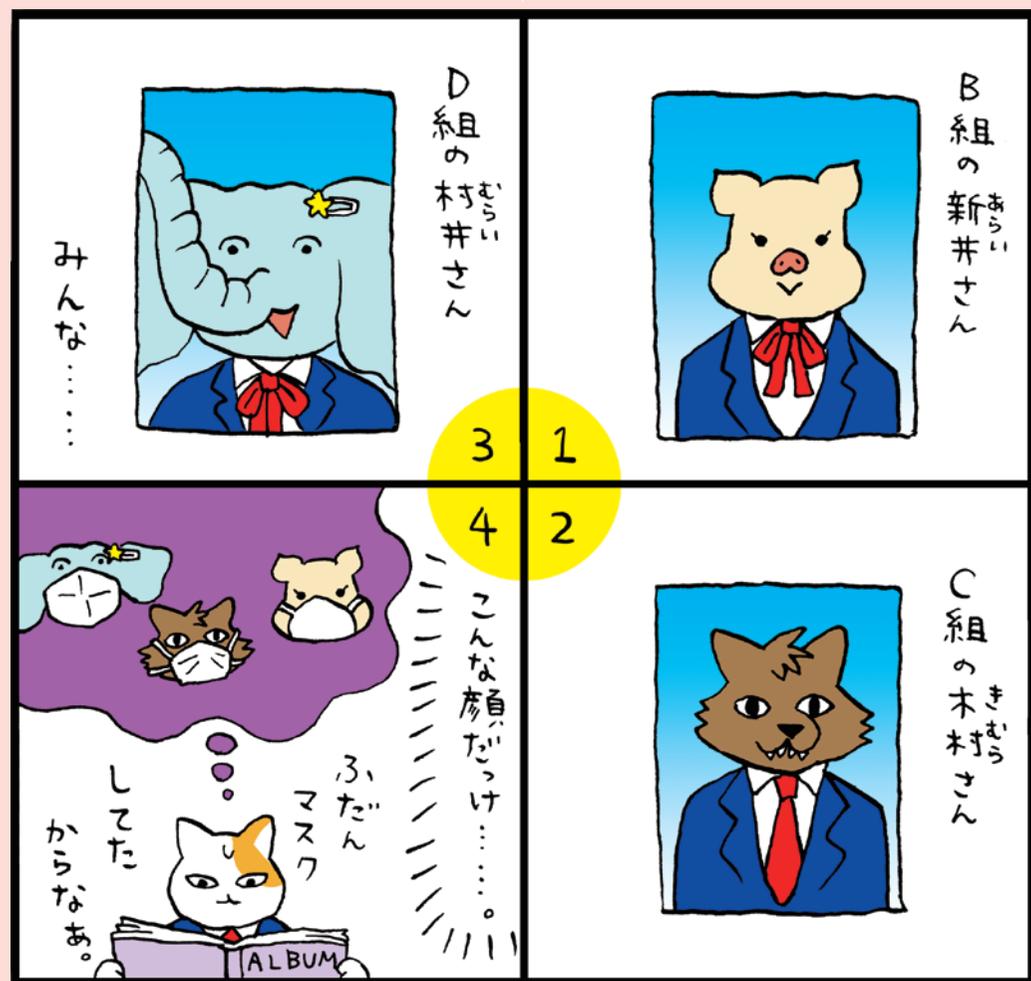
大玉送りで一度も大玉さわれない。



理科の実験中、氷砂糖  
こっそり食べたくなる。



卒業アルバムの個人写真で久しぶりに顔を見る。



# 目で読むSDGs



## 今日からできる食品ロス対策 みんなの「あたりまえ」を見直して 日々の食事からムダをなくそう！

日本では、年間約522万トンの食品ロスが発生しています。なぜ、まだ食べられる食品がこんなに捨てられているのでしょうか。国立環境研究所の吉田綾先生は「みんなが『あたりまえ』だと考えている仕組みや習慣に『因がある』と話します。

### まだ食べられる食品が毎日ムダになっている

「食事」は、人が生きていくうえで欠かすことのできない営みです。豊かな食生活は、おなかも心も満たしてくれます。

一方で、私たちの食事は「食品ロス」の要因になっています。「食品ロス」とは、まだ食べられるのに捨てられてしまう食品のこと。似たような言葉に「食品廃棄物」があります。こちらは野菜の芯や魚の骨などの食べられない部分も含まれています。

日本では年間約2372万トンの食品廃棄物が発生しており、そのうちの約522万トンが食品ロスです。国民1人あたり、1日約113グラム。茶碗1杯分のご飯に近い重さです。100グラム程度とはいえ、積み重なると年間約41キログラムに達します。

これほどの食品が捨てられている理由とは？ 吉田先生は、世の



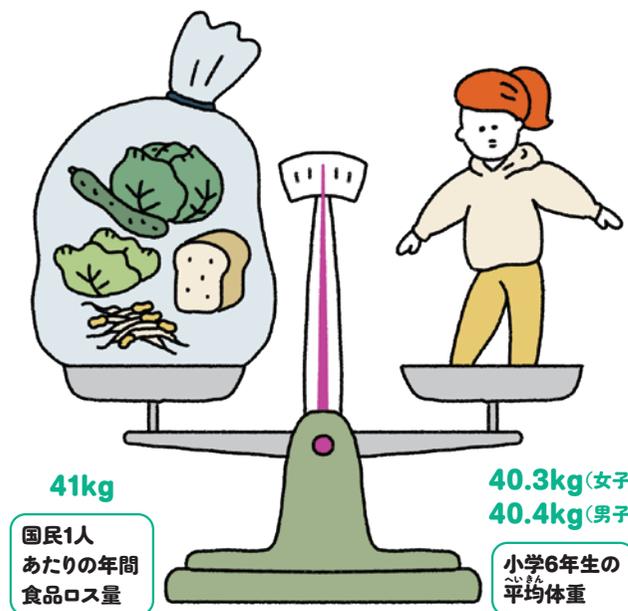
**吉田綾先生**  
ごみ問題やリサイクルの現状を通して、持続可能なライフスタイルを研究している。書籍「これってホントにエコなの？」(東京書籍)の監修も担当。

中で「あたりまえ」だと思われている仕組みに問題があるといえます。

「私たち消費者は『コンビニやスーパーマーケットにはたくさんの食品が並んでいる』のはあたりまえだと思いがちです。店側もそれに応えようと商品を充実させますが、全て売り切れのとは限りません。消費期限が迫ったら結局捨てられてしまいます。」

食品ロスは、家庭からも発生しています。原因は、皆さんの食習慣にも深く関わっています。

「おなかがいっぱいだから、苦手な食べ物が入っているから。そんな理由で、食べ残していませんか？ 家庭から出る『食べ残し』は年間約105万トン。外食産業で発生する分を加えると約160万トンになります。つまり、日本で生じる食品ロスの約3分の1が『食べ残し』によるものなのです。」



日本では、まだ食べられる食品が年間約522万トンも捨てられています。国民1人あたりで換算すると、年間約41キログラムになります。身近な数字でたとえるなら、日本の小学6年生の平均体重と同程度。実感はなくても、私たちは日々の暮らしの中でたくさんの食品をムダにしているのです。

出典：国民1人あたりの年間食品ロス量／消費者庁「食品ロス削減関係参考資料」(令和4年12月1日版)、小学6年生の平均体重／文部科学省「学校保健統計調査」(令和2年度)

### 「あたりまえ」を見直して食品ロス削減と向き合おう

小中学生の皆さんでも、食品ロスを減らすことができます。

「まずは、食べ物を残さないことを意識しましょう。外食するときも食べられる量だけ注文して、それでも残った場合はお持ち帰りする手もあります。」

乾麺や缶詰などの長期保存できる食品は、家の冷蔵庫や戸棚の中で眠りがち。こうした保存食品の活用も大切なことです。

「宝探し感覚で賞味期限が迫った食品を探してみよう。賞味期限が切れた食品でも慌てて捨てないでください。賞味期限が切れていても、食品の色やにおい、味などをチェックして異常がなければ、まだ食べられます。」

野菜が余ったときは、先生も実践している使いきりレンジピの出番。その名も「余り野菜 de みそ汁」です。

「みそ汁はどんな食材でも合わせやすく、きゅうりやトマトなどの生で食べるような野菜を使ってもおいしく仕上がります。余り野菜を入れてもOK。みそ汁の作り方は、学校の調理実習で習うことも多いので保護者の方とぜひ挑戦してみてください。」

自分で調理してみると、捨ててしまいがちな葉っぱや皮、切れ端などの食材や余りやすい食材などの食品ロス予備軍も見えてきます。こうした工夫を「あたりまえ」のこととして身に付けられれば、食べ物を捨てることもぐっと少なくなります。

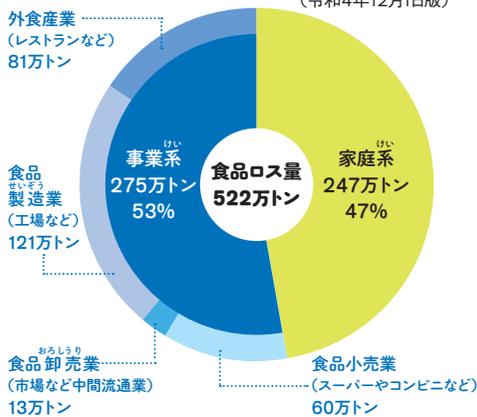
### 実は地球温暖化も食品ロスが関係している

食品ロスは、環境負荷にもつながっています。食品の原材料調達から廃棄・リサイクルまでのプロセスの中で排出される温室効果ガスが地球温暖化の要因とされているのです。このごろは、環境負荷が気になる人のために「カーボンフットプリント」によって温室効果ガス排出量を表示する食品も出ています。

食品は、さまざまな資源を投入して、消費者の手に渡ります。しかし、資源も無限にあるわけではありませぬ。どんな食品もムダにはできないのです。私たちの未来のために、日々の食事を見直してみませんか？

### 食品ロスの発生要因

出典：消費者庁「食品ロス削減関係参考資料」(令和4年12月1日版)



家庭から出る食品ロスの内訳は、料理の食べ残しと使わないまま賞味期限を迎えた「直接廃棄」の食品が大部分を占めています。また、飲食店から出る食品ロスの大半が食べ残し、というデータも。食品メーカーや食品を取り扱うお店などでは、売れ残ったり、返品されたりした食品などが捨てられています。

### カーボンフットプリントって何？

「カーボンフットプリント」(Carbon Footprint of Products) とは、食品(製品)やサービスが「一生」のうちで排出する温室効果ガスを計算する仕組みのことです。ここでいう「一生」とは、原材料調達、生産、流通、使用・維持管理、廃棄・リサイクルの一連のプロセスを指しています。計算した排出量を表示する際は、分かりやすく二酸化炭素量に換算されます。消費者や企業が環境問題に関心をもってくれるように、2009年に国の取り組みとして始まりました。



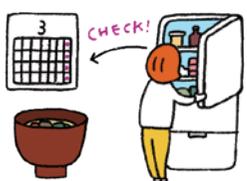
### 今日から私たちができること

#### 1 食べられる量を注文する



家だけではなく、外で食事をするときも自分がおいしく食べられる量を注文し、残さないうちにしましましょう。「大盛り」を注文して残すとお店の人の厚意もムダになります。「普通」でも多い場合は、お店の人に「少なめ」にできないか聞いてみるのもおすすめです。

#### 2 「余り野菜 de みそ汁」を作る



野菜は傷みややすいので、いつの間にか食べられなくなっていた、なんてことも起こりがち。そんなことにならないよう、買い物は計画的に。新たに買い足すときは、まず家にある食品をレスキューしてください。余り野菜が見つかったらみそ汁に使いましょう。

#### 3 すぐに食べるつもりなら、賞味期限の近い食品から購入する



コンビニやスーパーマーケットで売っている食品は、商品棚の奥にあるものほど新鮮です。でも、すぐに食べるつもりなら、賞味期限が近い手前の食品を取って、食品ロス削減に貢献してみてください。値引きされた賞味期限切れ間近の食品も、かしく活用しましょう。



# 雄大な自然が目の前！ スポーツも裁縫も 大好きなアクティブ少年

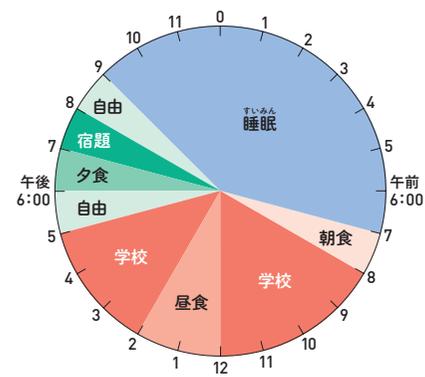


郴州市の歴史的建造物「五嶺閣」の前でポーズを決めるミンシュウさん

世界の友だちは、いつたいどんな一日を過ごしているのだろう。日が暮れるまで外で遊んでいる？ それとも、放課後は塾で勉強しているのかな？  
今回は自然豊かな中国湖南省郴州市に住む9歳のミンシュウさんにお話を聞いてみました。

リ・ミンシュウさんが住んでいる湖南省郴州市は、市街地のすぐそばに雄大な自然が広がっているよ。赤い岩肌をそり立つ「丹霞地形」が特に有名で、大地のパワーを間近に感じられるんだ。  
ミンシュウさんも自然が大好き。「飛天山国家地質公園」では、揚げやキャンプ、「東江湖」では、魚釣りや水遊びを楽しんでいるよ。「魚は食べるのも好きで、特に『川魚のスープ・ビーフン』が大好き。ほかに『川魚の唐辛子煮込み』や名物の『臭豆腐』（発酵した干し豆腐）もおすすめだよ！」  
中国も日本と同じで中学校までが義務教育。学費も無料だよ。基本的には居住地区の公立学校に進学する。特例として、すぐれた成績や試験の結果によって、生徒の要望があれば、行きたい公立学校を選ぶこともできるんだ。ミンシュウさんも自宅から歩いて五分ほどの小学校に通っているよ。「好きな科目は、『国語』と『体育』、それと『労働』です。裁縫と料理が楽しい！」  
「労働」は、日本の家庭科に相当する科目で、裁縫や料理だけでなく、靴磨きや家電製品の使い方などについても学ぶよ。  
中国独特の科目には、ほかに「道徳と法治」がある。社会常識や学生規則、環境保護に加えて、インターネット上のマナーや広告に関する知識も勉強するんだ。さすがデジタル化が進んでいる中国だね。  
ミンシュウさんは、習い事もがんばっている。絵画教室とキックボクシングのジムに通っているんだ。「将来は、デザイナー、アスリート、俳優のどれかになりたい。人を喜ばせる仕事がしたいな。」好奇心旺盛で何でも前向きにチャレンジするミンシュウさんなら、きっとかなえられるはず。

## ミンシュウさんの1日



**午前7:00 起床**  
洗顔、歯磨きのあと、英語の勉強をするのが日課です。この日の朝食は菜のお粥、饅頭、ソーセージ、ランチョンミート、黒トウモロコシ。



**午前8:00 登校・授業**  
登校後、音読、予習をして、宿題を提出します。授業の合間の運動時間には、じゃんけんゲームやサッカー、追いかっこをよくします。



**午後12:00 帰宅、昼食**  
給食は選択制です。僕は学校が近いので、帰宅して家族と一っしょに昼食を食べています。この日のメニューは、唐辛子の肉いため、牛骨とウモロコシのスープなどでした。

**午後2:00 再登校・授業**  
**午後5:00 目のマッサージ・自由時間**  
授業の合間や終わりに約5分間、目の周りや頭部のツボをマッサージ。近眼を防ぐためです。

**午後6:00 帰宅・夕食**  
**午後7:00 宿題**  
**午後8:00 自由時間**  
宿題が終わったら自由時間です。中国将棋や五目並べなどのゲームで遊んだり、読書をした。図書館から毎週3冊本を借りていて、特に歴史漫画と動物小説が好きです。夕食の準備や部屋のかたづけなど、毎日最低10分は家のお手伝いをしています。時間があるときは餃子や動物饅頭を作ることも。



**午後9:00 就寝**

- プロフィール**  
名前 李銘修(小学校4年生・9歳)
- 好きなこと**  
キックボクシング、サッカー、水泳、バスケットボール、砂遊び、インラインスケート、読書
- 好きな教科**  
国語、体育、労働(日本の家庭科に相当。特に裁縫と調理)
- 好きな食べ物**  
ビーフステーキ、焼肉、唐辛子の肉いため、牛乳
- 行ってみたい国**  
ニュージーランド(美しい大草原とオーロラにあこがれて)
- 日本について知っていること**  
アニメはドラえもん、ウルトラマン。食べ物はお寿司。
- 将来の夢**  
アスリート、デザイナー、俳優
- 地球のためにやっていること**  
ゴミを分別、ゴミ拾い、電気をこまめに消す。
- リラックスタイムは何をしている?**  
中国将棋、五目並べ。読書は1時間。歴史漫画と動物小説が好き。テレビは30分。アニメが好き。ウェブで情報収集やオンラインゲームで遊ぶ。好きなゲームは「ミニワールド」、「三国志オールスターズ」、「猫とネズミ」、「地下鉄で走る」など。

### 中国湖南省郴州市って、どんなところ?

面積 およそ21万 km<sup>2</sup>(湖南省) / およそ1万9,000km<sup>2</sup>(郴州市)

人口 およそ6,600万人(湖南省、2020年) / およそ460万人(郴州市、2020年)

※ちなみに日本は、面積37万8,000 km<sup>2</sup>、人口1億2,500万人(2021年)

「郴」は、「森の中の城」という意味。自然がとても豊かで、面積の多くを森林が占めているよ。

中国語の「こんにちは! 你好(ニーハオ)!」  
中国語の「ありがとう! 谢谢(シェイシェイ)!」

日本の26倍もの面積をもつ中国は、23の「省」という行政単位で地域を分けているよ。「省」は日本の「県」よりもずっと大きくて、郴州市が属している「湖南省」は日本の半分ほどの面積もある。「湖南」の由来は、淡水湖では中国で2番目に大きい湖「洞庭湖」(なんと琵琶湖の4倍!)の南側に広がる地域だからなんだ。豊富な水資源を生かして、中国でも有数の稲作地帯としても知られているよ。郴州市も米作りが盛んで、市街地から少し離れると、美しい田園風景が広がっている。伝統文化も根付いていて、太鼓で伴奏する歌舞劇「花鼓」が有名だ。

郴州市にある東江湖は人気の観光スポット。朝もやが立ち込めると、いっそう幻想的に。

# 第一回「青いスピンの」作品募集

第一回「青いスピン」作品募集には、361作品の応募がありました。たくさんのご応募、ありがとうございました。厳正な審査の結果、次のとおり受賞作品を決定いたしました。

## 結果発表

入選作品は、「青いスピン」に掲載いたします。「自動販売機」は、本誌十ページよりお読みいただけます。「金太の花」は、第三号に掲載予定です。



入選

「自動販売機」 香久山ゆみ

いちかちゃん、のださん、「私」は同じグループ。ある金曜日、「深夜0時に公園の裏の自動販売機の取り出し口に入ると、引きずりこまれる」というわさが話題になった。いちかちゃんは、のださんに、うわさを確かめるよう言いつけた。夜中に外出なんてできるはずがないのに。次の週、私たちはそのことをすっかり忘れていたけれど……。



入選

「金太の花」 おぎなお紺

飼っていた金魚の金太を、不注意で死なせてしまった「ぼく」。金太は、一年前のお祭りですくった金魚だ。庭に穴をほり、金太を埋めて、お墓を作った。小さな弟の優介が、「大きくないあれ。」と、金太のお墓に水をかける。次の日、金太のお墓から芽が出てきた。芽はぐいぐいと大きくなっていく。もしかしたら、金太の花が咲くのだろうか。



佳作

「カタメのこと」 松下卓

「ぼく」の小学校の通学路にあるアパートには、じいさんが独りで住んでいる。じいさんはいつも、のら猫のカタメの世話をしていた。ある冬の日、カタメがいなくなつて……。

「言葉のない私たち」 桜井かな

小学六年生の「私」は、友達のアマちゃんと交換日記を始める。しかし、書きたい言葉が思いつかばず、絵を描いてごまかしていた。クラスメートの小川さんも交換日記に加わりたそうな様子だが……。

## 選評

### 入選「自動販売機」

●人物描写がうまい。自分というものをかろうじて保つために冒険に出て、自分の足で立つために友達と決別する「のださん」は魅力的。  
(角野)

●ホラーテイストな作品と思いきや、い

### 入選「金太の花」

●今回の応募作品は、友達関係に関する話が多かった。なかでもこの作品は、登場人物の強いアクションにより、ほのかなあかりが見えた。  
(安東)

●一つの問題にフォーカスして理解しやすい。心が通い合った存在を死なせてしまった悲しさがしつかり描かれている。  
(角野)

●すみずみまで計算されている、よい作品だと思ふ。金魚の墓から芽が出てきてどんどん恐怖感を抱いていくところなどおもしろい。  
(西本)

### 佳作「カタメのこと」

●作者の気持ちがあまらずで、読んでい

●素直な作品で、流れがしつかりしている。命の重さを分かりやすく書いていて、共感しやすい。  
(西本)

●猫がとても猫らしく描かれている。読み心地はよい。「じいさん」の亡くなり方が唐突に感じた。  
(安東)

### 佳作「言葉のない私たち」

●文学作品としては、もう少し子供たちの心の奥を描いてほしい。二人の少女が自問自答するところが書けていたら、作品に深みが出たと思う。  
(角野)

●今の子供の現実を反映した作品。作者がこの現実をどう考え、どんなメッセージを伝えたいのか、もう少し描けてほしい。  
(西本)

●思いを言語化できない子供たちを、三者三様に表している。これだけリアルに描いたことを評価したい。  
(安東)



最終選考会にて。左から、西本鶏介先生、角野栄子先生、安東みきえ先生。

# 『目でみることば』

シリーズ  
のご紹介

文・岡部敬史  
(おかべたかし)  
写真・山出高士  
(やまだたかし)



定価 1,430円

**似ていることば**  
「フクロウ／ミミズク」「あふれる／こぼれる」などの似ていることばを写真でくらべて解説。

**似ている英語**

「mouse／rat」「big／large」などの似ている英語の単語を写真でくらべて解説。



定価 1,430円



定価 1,430円

**くらべる東西**  
「タクシー」「湯船の位置」「いなり寿司」など34の関東と関西の文化のちがいを写真でくらべて解説。



定価 1,430円

**くらべる日本 東西南北**  
「城」「餃子」「スコープ」「つり革」など日本全国の文化・ことば・物のちがいを写真でくらべて解説。

**くらべる世界**

「雪だるま」「ジャンケン」「カップヌードル」など世界中の文化と物のちがいを写真でくらべて解説。



定価 1,430円

**くらべる値段**

¥5,000と¥500,000の「盆栽」、¥9,000と¥20,000の「包丁」はどこがちがう？ 34の値段のちがいを写真でくらべて解説。



定価 1,430円

**しらべるちがいのずかん**

「塩と砂糖を見分けるには?」「おいしいミカンはむきやすい?」身近なものの意外なちがいをくらべて分かる雑学図鑑。



定価 1,760円

**目でみることばのずかん**

ことばの由来、漢字の成り立ち、類義語の比較など、38組のことばが大迫力の写真で一目瞭然、一気に納得。



定価 1,760円

目で見める方言

それぞれの地域の出身者にはおなじみの「方言」。全国47都道府県別にピックアップし、文化的な雑学とともに紹介。



定価 1,430円

目でみる日本史

日本の歴史の転換点に、あの人はどんな「風景」を見ていたのか? 34名の歴史的人物が見た風景・場面を周辺雑学とともに紹介。



定価 1,430円

目でみることば

「高飛車」「凶星」「五角」など40のことばの由来を写真で解説。



定価 1,430円

目でみることば 2

「ぶっきらぼう」「醍醐味」「銀ブラ」など40のことばの由来を写真で解説。



定価 1,430円

目でみる漢字

「虫」「夏」「椿象(カメムシ)」など38の漢字の姿を撮影し、由来と雑学を紹介。



定価 1,430円

目でみる数字

「ハリセンボン」実は350本。身の回りの「数字」を取り上げて撮影。意外な知識とともに解説。



定価 1,430円

## 21ページの追加問題の解答

このように色分けすれば、タイルを1枚置くごとに、赤色、青色、黄色のマスが1つずつ覆われていきます。しかし、**図8**の各色のマスは等しくないのです。だから、タイルをすべて敷き詰めることはできません。



図6

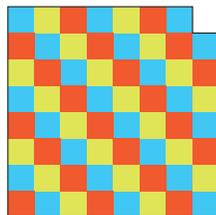


図8

その他、東京書籍発行の本についてはこちら



第2回

# 作品募集のお知らせ

## 募集内容

小学校高学年から中学生を読者対象とした物語、小説。

## 応募規定

字数：400字詰め原稿用紙10枚以内。  
書式：手書きの場合、400字詰め原稿用紙（縦書き）を使用してください。

パソコンの場合、横向きのA4用紙に、縦書きでお願いします。末尾に400字詰め原稿用紙で換算した枚数を明記してください。

[手書き・パソコン共通] 原稿用紙の1行目に作品のタイトル、2行目に作者名（ペンネーム、あるいは本名）をお書きください。本文は3行目から書き始めてください。

A4用紙1枚に下記の内容を明記し、同封してください。

- ①作品のタイトル・枚数、②作者名（ペンネーム・本名）、③住所・電話番号・Eメールアドレス、④年齢、⑤職業

\*ペンネームの場合は、必ず本名も明記してください。ペンネーム・本名には、読み仮名を付けてください。

## 注意事項

- ・応募資格の制限はありません。ただし、未発表の作品に限ります。他の児童文学雑誌やコンクール等に応募した作品は対象外です。
- ・応募作品は第三者の著作権を侵害していないオリジナルの作品に限ります。また一人一点までとします。なお、応募作品は返却いたしませんのでご了承ください。

## 締め切り・発表

締め切り：2023年8月31日(木) 当日消印有効  
発表：「青いスピン」第4号(2024年4月発行)、および「青いスピン」ウェブページ

\*掲載作品には小社規定の原稿料をお支払いたします。なお、掲載された作品の出版権は小社に帰属します。

## お問い合わせ・作品送付先

東京書籍株式会社「青いスピン」作品募集係  
〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1  
✉spin@tokyo-shoseki.co.jp

\*審査結果に関するお問い合わせには応じられません。

## 選考委員

角野栄子(童話作家)  
西本鶏介(児童文学作家・児童文学評論家)  
安東みきえ(児童文学作家)

【応募に関する個人情報の取り扱いについて】東京書籍では、ご提供いただく個人情報の処理について、適切な安全対策を講じ、漏洩、滅失およびき損が生じないようにいたします。つきましては、下記の内容をご理解いただき、ご同意の上で個人情報を提供くださるようお願いいたします。また、16歳未満の方は保護者の同意を得た上でお申し込みください。■個人情報の利用目的・開示：ご提供いただいた個人情報につきましては、次の目的の範囲内で取り扱います。○選考作業および入選等のご連絡のため。○個人情報の属性の集計・分析を行い、個人が特定できないように加工したものを作成し、東京書籍のサービス開発・提供等を行うため。■個人情報について：法令等により必要と判断される場合を除き、本人の同意を得ずに第三者に提供することはありません。個人情報のご提供は任意ですが、応募いただくために必要なものです。ご記入いただけない項目がある場合、応募をお受けできない場合がありますのでご了承ください。■委託について：ご提供いただいた個人情報につきましては、選考や書類の発送など利用目的の実施に必要な範囲内で、業務を委託する場合があります。■窓口：ご提供いただいた個人情報に関する質問および変更等については、「青いスピン」編集部 (spin@tokyo-shoseki.co.jp) へお問い合わせください。

# 青いスピンの

# ウェブサイト始めました！



こちらのコードを読み取ってください  
(URL: <https://bluespin.tokyo-shoseki.co.jp/>)  
※インターネットの通信費がかかります。

## いつでも どこでも

「青いスピンの」に掲載している読み物は、全てウェブサイトからも読むことができます。

## お気に入りを 見つけよう

過去の号に掲載している作品も読むことができます。関連するおすすめ作品もぜひ読んでみてください。

## 最新情報を チェック

ウェブサイトにはかないコンテンツや、最新情報を掲載する予定です。

## ご感想をお待ちしています

「青いスピンの」へのご意見やご感想は、こちらのコードにアクセスしてご記入ください。今後の編集作業に生かしてまいります。

## 作品募集の お知らせ

小学校高学年から中学生を読者対象とした物語、小説を募集しています。  
※くわしくは中面をご確認ください。

32  
ページ

青いスピンの 第2号  
(2023年 春)  
2023年4月1日発行

発行者 渡辺能理夫  
発行所 東京書籍株式会社  
印刷・製本 株式会社リーブルテック

ホームページ <https://www.tokyo-shoseki.co.jp>  
東書Eネット <https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/>  
東書WEBショップ <https://shop.tokyo-shoseki.co.jp>

本社 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1  
Tel:03-5390-7445(営業総轄本部) Fax:03-5390-6012  
支社・出張所 札幌 011-562-5721 仙台 022-297-2666  
東京 03-5390-7467 金沢 076-222-7581  
名古屋 052-950-2260 大阪 06-6397-1350  
広島 082-568-2577 福岡 092-771-1536  
鹿児島 099-213-1770 那覇 098-834-8084

表紙絵 みなはむ  
アートディレクション 山田和寛(nipponia)  
表紙・本文デザイン 山田和寛+佐々木英子(nipponia)

